

今日、私たちはあらゆる面でレンズの恩恵を強く受けているが、就中、眼鏡は最も身近かな必需品で、眼鏡なくして私たちの生活は考えられない。

本書は、明治十六年（一八八三）創業以来一〇〇年を超える眼鏡小売専門店の東京メガネの四代社長白山晰也氏が、長年にわたって蒐集された東西の豊富な資料を、十年近い年月をかけて克明に研究されて上梓されたもので、「国内外の眼鏡にかかわる歴史上の逸話」が、その時々々の社会の様子、人びとのありようを面白く語っている。

先ず、表紙を繰ると東京メガネ所蔵の「世界の眼鏡蒐集館」という見出しの古い眼鏡のカラーグラビア頁が目を楽しませてくれる。

内容は、五部Ⅱ「伝来」「事件」「絵画・文芸における諸相」「産業・広告」「流行・普及」Ⅱ十二章の項目に分けて系統的に書きすずめられている。随所に掲げられた図版や資料、が眼鏡が各時代どのような位置づけをもっていたか興味深く教えてくれる。

各項の終りには参考文献や注があげられているが、各頁の下部にも本文中に出ている人名、地名、書名、用語等の解説があって、専門家でなくとも容易に読みすすめることができる配慮はありがたい。

眼鏡の誕生は伝説としてはネロの時代にまでさかのぼるが、文

書に眼鏡に関する記事が初めて出てくるのは一三〇〇年代になってからという。その発明はいずれも聖職者によってなされたという説がおおかたであるが、個人の名前は記録に残っていない。当初、宗教上の理由から「眼鏡をかけると、突如として物が見えるようになることが不思議」で、眼鏡が妖術、魔術と同じように悪魔の道具と考えられていた。そのため、発明者の名は歴史の闇にうずもれてしまったのではないかという話が冒頭の部分で紹介されているが、本書を読み進めるのを促す面白い話である。

南蛮文化が盛んに移入されるようになる十七世紀になって我国にも望遠鏡や眼鏡がもたらされるが、それはたいへん珍重されたもので、当時の権力者たちが、伝来した眼鏡とどのように関わっていたか、交易とそれに関わる事件の経緯や輸入の状況などを個人の日記や史料が伝えている。

時代が下って眼鏡が流布するに従い、それが絵画や文芸や小咄などにも登場することとなり、細かい手仕事をする職人たちが使っていた様子や、どんな形のものであったかということが、当時の庶民の風俗を画いた浮世絵や本の挿絵などの図からうかがえる。

眼鏡がポルトガルやオランダ、中国から我国に輸入されて以来、製作技術も長崎から大阪、京都、江戸へと伝えられていくが、「江戸時代の技術」というのが『勘』と『経験』による職人芸で口伝によって伝承されたため、文章で残された資料は少ないという。

我国では殖産興業政策の一環として、明治六年（一八七三）ウイン万国博覧会へ参加した。それをきっかけにヨーロッパのレンズの研磨技術を修得して眼鏡産業が近代化していく様子や、内

国勸業博覧会の様子なども詳述されている。しかし、眼鏡産業が当時、政府の期待に応えるまでに至らなかつた経緯にもふれられている。

江戸から明治に至る広告を通してみる眼鏡店や、ステータス・シンボルとしての眼鏡の用いられ方を外人画家たちが漫画などで画いた資料も興味深い。

本書は、資料による社会史的視野からみた眼鏡の発達史で、文章も平易で読みやすい。著者のきめ細かい研究のご苦労に敬意を表するとともに、是非、多くの方々に御一読をおすすめしたい。

(斎藤 仁男)

〔ダイヤモンド社、一九九〇年、A五判、一一三頁、定価三、二〇〇円〕

三浦豊彦著

『暉峻義等——労働科学を創った男——』

著者は労働衛生史では多数の研究を発表されている。この分野でのベテランであることは周知のことであり、現に「労働衛生史学会」の創立者であり、この方面での資料のまとめ役でもある。その著者が長く勤務し、指導も受けた暉峻所長の一生を紹介したものであるから、単なる資料としても貴重なものであることは言うまでもない。

私も戦時中から労研に勤めていたので、暉峻所長の風貌には接

していたが、余り話をすることもなくその生い立ちなども知らなかつた。なお労研内では所員は所長にも先生とか所長とかの敬称で呼ばずに、「さん」だけで呼んでいた。三浦さんはある日、既に所長を辞めておられる、所長に長時間の面接をしてその生い立ちを『労働の科学』に寄せたことがある。多くの所員はこれで暉峻所長の生い立ちを漠然とでなく、かなり詳細に知つたわけであつた。

それほどに暉峻さんの一生は複雑さをもっている。そのため理解し難いところも多いのである。そのため暉峻所長はある人からは、労働者の搾取に手を借した人であるときめつけられ、他の多くの人からは労働者のために働いた科学者であると賞賛されているということになつていく。

このような複雑すぎる暉峻所長の解明にはその生い立ち、その研究態度、研究の蓄積、研究の見通しなどについて、詳しい客観的な発掘が必要になる。このためにこの三浦さんの書いた本は非常によい資料であることは間違いない。この意味で労働科学や労働問題に関心を持たれる方々に、この本を読まれることを推薦しないわけには行かない。

また、次の意味で暉峻所長の一生の研究は、暉峻所長時代に生れた良心的な科学者の生き方にその内面の葛藤を比較して当時の風潮を知るうえによい資料を提供するものと思われる。暉峻所長が生れたのは一八八九年で、七月には東海道線が新橋から神戸まで開通している。七高を卒業した一九一〇年は幸徳秋水の事件が発生した年である。東大医学部を卒業した翌年一九一八年には米